

# びわこの 考湖学

8

## 信玄の伝説：「我が旗を立てよ」

琵琶湖を考える上で非常に重要な要素である瀬田

橋。これから3回にわたって、瀬田橋について話をすることにしませう。

瀬田川にかかる唐橋の下流約80坪の川底で、奈良時代から中世まで4期の橋脚遺構が発見されました。滋賀県のお家芸ともいえる潜水調査によって見つけれ

たものです。最も古いものは、川底を丁寧に整地した後、カシの丸太材を縦横に並べて基礎とし、その上に約45°角、

長さ約6坪のヒノキ材6本を扁平な六角形に組み、浮き上がりを防ぐため多量の石が載せられていました。

この橋脚は、当時の日本では例を見ない構造で、新羅王京である慶州(現在の韓国・慶州)で7世紀後半に構築された月精橋に類例

### 瀬田の唐橋 その1



唐橋の復元模型

で幕府軍が勝利を収めた後、上皇軍が瀬田橋の防御を解くや幕府軍が京都へなだれ込んだといえます。建武3(1336)年には足利直義らと名和長年らが瀬田橋で合戦しています。

瀬田橋の軍事上の重要性を物語るには、本能寺の変の事例が参考になるので詳しく見てみましょう。瀬田橋東詰に山岡景隆の瀬田城があり、織田信長恩顧の景隆は、本能寺で信長を討った明智光秀が京都から安土城に入ろうとして

山中にこもり、居城に火を放つことを察知。事前に橋を

もかなわず高島勝野で斬殺されるに至りました。

寿永2(1183)年7月、源氏の太田次郎兼定と倉光冠者が平知盛と橋を挟んで合戦。翌寿永3年1月には、源義仲が源範頼との合戦に備え、今井四郎兼平を瀬田橋に配しました。

承久3(1221)年の承久の乱でも、橋をめぐる攻防がありました。後鳥羽上皇軍の防御戦のひとつが瀬田橋であり、宇治の戦い

間に秀吉は巻き返しを図る



奈良時代ごろの唐橋橋脚台の遺構。現在の唐橋の約80坪下流で発掘された。大津市

「首都」といわれる東国といた話がありますが、事実ではないにせよ「瀬田橋を制するものは天下を制する」というイメージが共有されていることがわかりま

軍事以外のエピソードでは、京都(平安京)から伊勢斎宮への斎王群行が利用されていますし、建久6(1195)年に東大寺落慶供養で上洛した源頼朝も渡っています。いずれも数百人からなる行列でした。

小人数で渡った人々もいましたが、さほど目立ちません。一方で、寛仁4(1020)年12月、『更級日記』の作者、菅原孝標の女が「勢多の橋みなくづれて、わたりわずらふ」と記しているように、橋が落ちて渡れなかったとする記事は幾つか見られます。

恒常的な管理は難しかったことがうかがわれます。

(滋賀県文化財保護協会 畑中英二)